

宝治百首

水辺蛭

山水のたぎりておつる岩かげに

御製

玉ちりまがひとぶほたるかな

とぶ蛭消えぬ思ひもあらはれて

道助

水かげ草に露ぞおきそふ

下くらきあしまの水に影みえて

実氏

数もあらはにとぶほたるかな

きよきせに蛍ゆふる玉ざさの

基家

葉分の水の色ぞ涼しき

みごもりのぬまのいはかき我ばかり

家良

行方みえてとぶ蛍かな

行くほたるよそにみぎはのひかりにも

基良

窓をてらさぬ身はしづみつつ

ながれ行く音もすずしき山河の

隆親

岩間がくれにとぶほたるかな

もえあかす夜はの螢の思ひにも

為家

野中の水やぬるまざるらん

あし曳の山水のしたにさへ

公相

影をならべてとぶほたるかな

夏ふかみありともみえぬ忘水

実雄

すだく螢のひかりにぞしる

袖のうへの思ひはおなじ夏むしの

信覚

影やどし行く山川のみづ

為経

あたりだにすずしき水の上になど

もえて螢のよをわたるらん

忠定

外よりも螢のしげく成行くは

のさはの水にかけやうつれる

資季

いづ方に行くともみえぬ沼水に

影をならべてとぶ螢かな

頼氏

くれゆけばこの下くらき岩橋の

みたらし河にとぶ螢かな

蘆わくる波のよるとぞくからし

有教

おのれともして行く螢かな

夏のよは波にほたるの影そへて

師繼

みぎはによする玉かとぞみる

水の面にすだく螢をあつめこし

定嗣

しるしや今のひかりともなる

せきとめてすすむ木陰の山水に

成実

ゆふぐれしるくとぶ螢かな

蓮性

これは又衛士のたく火かももしきの
みかはの池の夏虫の影

顓氏

山河の岩間の水のたえだえに
ひかりもみえてとぶ螢かな

寂能

ふる河のみずくせかれししがらみに
のこるかがりは螢なりける

為氏

沢水に消えぬ思ひのほどみえて
われつれなくもとぶ螢かな

思ひけつかたもやあると石ばしる

真観

滝つあたりを行く螢かな

みなそこにもえたる影のうつらずは

寂西

かた思ひなる螢ならまし

夕すずみせくてふ水の影に又

為繼

もゆるほたるの思ひをぞみる

草ふかき沢べの水にすむ螢

経朝

いはぬ思ひのしたぞつれなき

行家

くれぬるか浅沢水のたえだえに

ひかりみえても行く蛍かな

成茂

かくれぬの流れぬ水にすだきても

いず方となくゆく蛍かな

隆祐

行く水の底にみだるる影みえて

よるの玉もやほたるなるらん

高倉

はれぬよは野沢の水に影まよひ

蛍も星もわきぞかねぬる

小宰相

くれにけりすだく螢の数数に

名もあらはるる井での玉水

「国歌大観」より